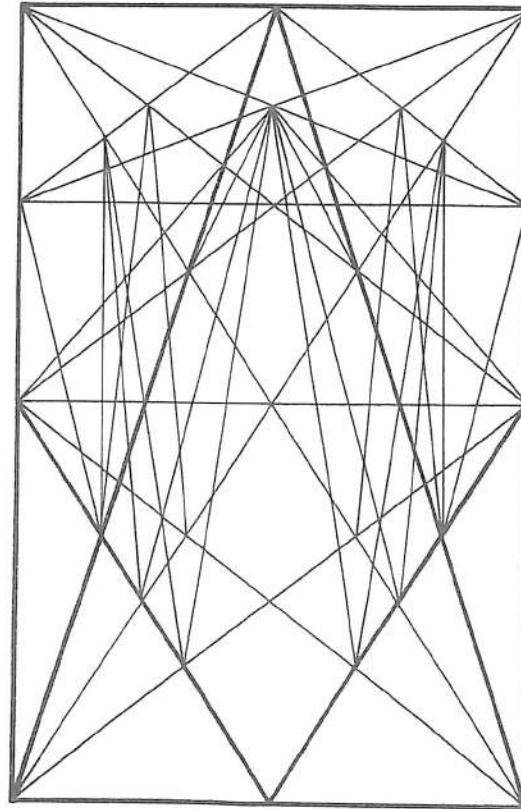


辻 邦生

詩への旅 詩からの旅



筑摩書房

一九六八年のクリスマス、私はパリの下町のレストランでぼんやり雑誌を拾い読みしていた。クリスマス特集号で、いろいろ愉しそうな記事がいっぱいだった。そのなかの小さな片隅に私は新進女流作家のクリスチヌ・ド・リヴォワールの次のような文章を見つけた。

「私には、クリスマスといえば静寂しか思いだせません。私は聖心女学院の幼い寄宿生でした。聖心女学院の先生がたは、とても詩的な方ばかりで、毎年、二十五日まで九日間の静修 (Une neuvaine de silence) を私たちに課されるのが習慣なのでした。その後、何年かたちました。けれどもクリスマスの思い出のなかで、もっとも印象に残っているのは、この寄宿学校のなかの静寂なのです。

九日間というもの、それは死んだような静けさでした。小さな女の子たちの黙りこくった行列が、聖母マリアの像の前を進んでゆきました。聖母の足もとには二つの籠が置いてありました。右の籠はからっぽでした。左の籠はジャガイモでいっぱいでした。小さな女の子たちは一人一人左の籠からジャガイモを取り、右の籠に入れるのです。それは沈黙を守りとおした子だけがやれることなりました。そして静修の終る九日目に、このジャガイモは全部貧乏な子供たちに与えられるのでした。

つまり私たちの九日間の沈黙は、こうしてこの貧乏な子供たちに与えるジャガイモに変形していったわけですが、この沈黙が、幼い私の心を深く動かしたのです。そのとき私は自分に向ってこう言ったものでした。へもしクリスチヌ、あんたが一言でも喋ったらどこかの子が、あんたの不謹慎な行いのために、ジャガイモをもらえないで飢えに苦しむのよ。私はその当時八歳でした。そして私は責任感というものを、そのとき、発見したのです。

私は賑やかな歌にみちた多くのクリスマスを忘れました。でも、この沈黙のクリスマスだけは決して忘れることはありませんまい」

私はこれを読みおえたとき、眼が熱くなるのを感じた。レストランの外を賑かに大勢の人が行き交っていた。しかし私は、遠く北フランスの小さな修道院寄宿学校にいる小さなクリスチヌの姿しか眼に浮かばなかった。私は何か大切なことを今まで忘れていたような気がした。この八歳の女の子が、貧しい子供たちのために感じた「責任」——その沈黙の、重い重い勤めのなかで、くっきりと彫像のように彫りぬかれた「責任」という意識——私はそ

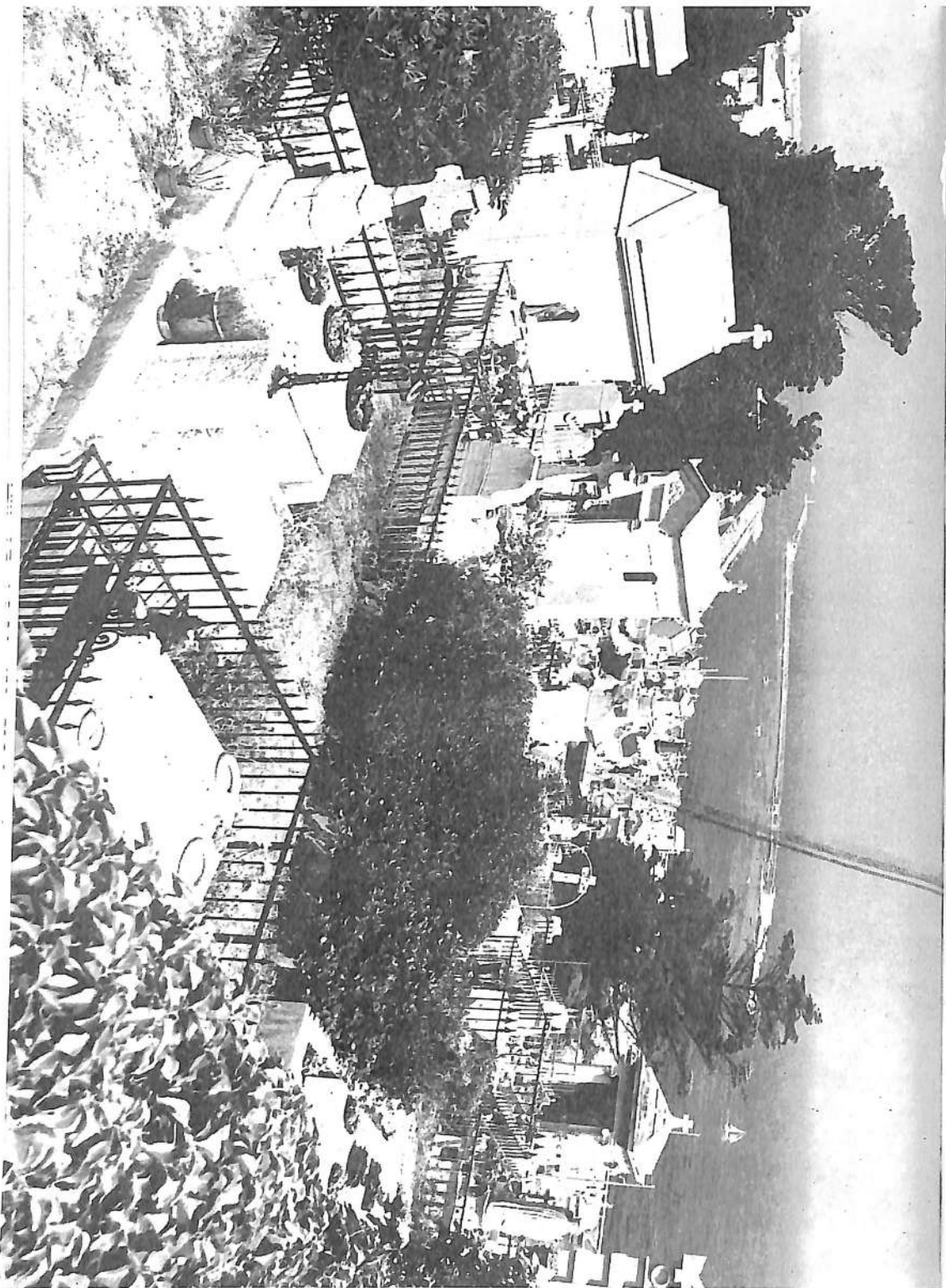
れをながいこと忘れつつけていたような気がした。

私も日々歌と踊りのなかを浮かれあるく一人の通行人にすぎないではないか。そういう反省が、そのクリスマスの夜ほど私の心に深く突きささったことは、かつてなかった。

私たち世代の人間は、戦争中の誤った精神主義に反発して、青年期には、この種の「精神」を憎悪しているのが普通だった。そのかわりに合理性と、確実な物質存在を自分の根拠と考えてきた。

しかしこうした合理主義もいつか息苦しい決定論に落ちていったし、物質存在への信頼も、単なる物質の中への埋没という結果を生んだにすぎなかった。誤った精神主義に反対して物質偏重に走ったものの、そこには、私たちを救いだすものはどこにもなかった。

私がヨーロッパに行つて見つけたものがあるとすれば、それは、こうして戦中戦後に失っていた「精神」というものだったと言えば、言いすぎになるであろうか。もちろんそれはあの誤った精神主義が振りまわしている精神ではない。誤った精神主義に対しては、私は、いままも反対である。だが、誤った精神主義に反対だからといって、いきなり物質主義へ飛びこむのは、やはり誤りであった。ここで批判され、検討されるべきは「誤った精神主義」であつて、「精神」一般ではない。誤った精神主義は、真の「精神」とは、むしろ無関係といつていいものなのだ。私はこうした自明なことを、たとえばウィーンの森閑としたクリスマス



や小さなクリスマスチーヌの沈黙などから、再発見してゆかなければならなかった。私たちは戦後、多かれ少かれ物質主義の影響から免れることができない。それがあの愚かしい「誤った精神主義」への復讐であるとしたら、復讐されているのは、私たちのほうなのである。私たちは最近のニュースで伝えられる様々な事件を通して、このことを、いやというほど知らされている。

もし私たちがあのウィーンのクリスマス前夜を支配した「沈黙」と「孤独」をとり戻すことができたなら、もし私たちが小さなクリスマスチーヌの感じたあの純な「責任感」を見出すことができたなら、おそらくそのとき私たちは真の「精神」を復権させることになるにちがいない。それはおそらく外に向っての行為であるより、自分の内面での、自己との対決の形をとるにちがいない。私たちは戦後「実存」という言葉を安易に使い、一時は猫も杓子も実存主義を口にした。そして構造主義が流行しはじめると、古い帽子をぬぎすてるように、いとも簡単に実存主義を本棚にしまいこんだ。

だが、思想、あるいは哲学とはあの小さなクリスマスチーヌが、沈黙の苦しい勤めのなかで感じとっていった「責任感」と同じく、ある長い、苦しい行為を通して、刻々にきざみだされてゆくものである。自ら模索し、渴望し、おののき、打ちひしがれ、また立ち直って求めつづけた揚句に、手に入るただ一滴の水のようなものである。自分との決定的な戦いなくして、



真の思想など、生れるはずはない。

それは他人の眼を意識して、その前で正しくあったり、その前で「カッコよく」あったりするような、弱々しい態度ではない。あくまで自己との格闘があって、そこから恒常的な「自己」という一つの形（フォルム）が生れてきたとき、私たちは、それをはじめて思想と呼ぶのである。

クリスマスが近づき、街に冷たい冬の風が吹くようになると、私は、いつも北国の沈黙した都会のことを考える。そしてそこで生れたさまざまな思想や音楽のことを考える。「だが、それは遠い異国のことであってはならぬ」とその度に自分に言いきかせる。「それはまさに私たち自身の精神の空間のことでなければならぬ。少なくともそうするように、歯をくいしばっても努めねばならぬ」

詩への旅 詩からの旅

一九七四年十二月一七月初版第一刷発行

著者 辻邦生

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 〒一〇一―九一

電話東京二九一―七六五一（代表）

振替東京四一二三

装幀者 栃折久美子

印刷 三松堂印刷

製本 和田製本

© Kunio Tsuji, 1974

0095-81039-4604